

日中関係「親しみ」と報道

加藤千洋さん講演 京大人文研

左京

現代社会に
 どのような課題
 があり、私たちはそれにど
 う向き合えばいいのか。連
 続セミナー「2016年の
 論点」が左京区の京都大人
 文学研究所で始まった。

1回目（5月26日）は、現
 代中国社会学や中国メディア
 を研究する元朝日新聞編集
 委員の加藤千洋・同志社大
 大学院グローバル・スタデ
 イーズ研究科教授が「日中
 関係とメディア報道―『中
 国の脅威』は虚か、実か
 ?」と題して講演した。

加藤さんは内閣府の世論
 調査結果をもとに、日本人
 の中国に対する親近感の変
 遷と、その背景について解
 説した。

加藤さんは1984年か
 ら3年半、朝日新聞の北京
 特派員を務めた。当時は回
 答した日本人の70%前後
 が、中国に親しみを感じて
 いた。「暗く閉ざされた文
 化大革命から中国が窓を開
 いていった時期で、日本メ
 ディアも、中国のプラス面
 を中心に報道していた」と
 振り返った。

ところが、89年6月の天
 安門事件で、学生を中心と
 した市民デモが武力鎮圧さ
 れ、日本にも衝撃が走った。
 その年の10月の調査では、
 中国に親しみを感ずるとい
 う人は急落して51.6%に。
 「考え方が日本と違つ、異質
 の価値観で動いている」と
 日本人は痛感させられた」
 21世紀になると、反日デ
 モや尖閣諸島をめぐる問題
 で、中国への親近感も低
 下。今年3月に発表された
 結果では、中国に親しみを
 感じないと答えた人は過去
 最高の83.2%となった。
 親しみを感ずる人は14.8
 %にとどまり、4年連続で
 20%を下回った。「背景に
 は報道の問題がある。冷め
 た対中感情を感じたメデイ
 アが社会に迎合し、悪循環
 が生まれた面があるのでは
 ないか」と指摘した。

「隣国の中国に80%もの

人が親しみを感ずらない、と
 いうことは正常だとは思え
 ない」。そう加藤さんは考
 える。「政府は外交力で対
 話を深めなければならな
 い。日中の民間交流も重要
 だ」と主張。「相手の本当
 の面白さや良さは、じつと
 り付き合わないと見えてこ
 ない」として、実際に中国
 を訪ねて、自分の目で見
 て、友人をつくることの大
 切さも説いた。

では、日中関係のあるべ
 き姿とは？ 加藤さんは
 「静友」という言葉を挙げ
 た。時には口論し、けんか
 もする友のことだ。「ただ
 仲良く乾杯するだけではな
 く、忌憚のない意見を交換
 することが必要な時代だと
 思う」と訴えた。

（大村治郎）



日中関係について講演する加藤千洋さん（左）。隣は司
 会の藤原辰史・京都大人文学研究所准教授＝左京区